

# 化粧規範に関する研究

—化粧規範意識を規定する個人差要因（他者意識・自意識・形式主義・独自性欲求）—

(2014年2月18日受付；2014年9月10日受理)

平 松 隆 円

スアンスナンタ・ラチャパット大学 専任講師

## Study on Makeup Norm

— Individual Difference Variables (Other-Consciousness, Self-Consciousness, Formality, Need for Uniqueness), Which Define the Awareness of Makeup Norms —

Ryuen HIRAMATSU, PhD.

*Lecturer (Full-Time), Suan Sunandha Rajabhat University, Thailand*

### Abstract

This study investigated how the individual difference variable influenced on the awareness of makeup norms. Subjects were 190 male university students (M=20.08 years old, SD=1.69), 342 female university students (M=19.33 years old, SD=1.27), 47 male adults (M=49.30 years old, SD=4.99), and 158 female adults (M=47.44 years old, SD=4.33). The questionnaire survey was conducted asking the awareness of makeup norms, self-consciousness, other-consciousness, formality, uniqueness. According to the result, male university students' awareness of makeup norms was specified by formality and uniqueness. Female university students' awareness of makeup norms was specified by external self-consciousness, public self-consciousness, private self-consciousness, formality and uniqueness. Adult males' awareness of makeup norms was specified by private-self-consciousness. Adult females' awareness of makeup norms was specified by internal other-consciousness, imaginary other-consciousness, public self-consciousness, formality and uniqueness.

(Received February 18, 2014; Accepted September 10, 2014)

**Key words:** *awareness of makeup norms, other-consciousness, self-consciousness, formality, uniqueness*

(Journal of the Japan Research Association for Textile End-Uses, Vol.55, pp.849-856, 2014)

## 要 旨

本研究は、化粧規範意識を他者意識・自意識・形式主義・独自性欲求がどのように規定するのかについて検討を行なうことが目的である。学生男子 190 人（平均年齢=20.08 歳, SD=1.69）、学生女子 342 人（平均年齢=19.33 歳, SD=1.27）、親世代男子 47 人（平均年齢=49.30 歳, SD=4.99）、親世代女子 158 人（平均年齢=47.44 歳, SD=4.33）を対象に、化粧規範意識、自意識、他者意識、形式主義、独自性欲求などを内容とする質問紙調査を行なった。その結果、おおむね学生男子では形式主義と独自性欲求が、学生女子では外的他者意識、公的自意識、私的自意識、形式主義、独自性欲求が、親世代男子では私的自意識が、親世代女子では内的他者意識、空想的他者意識、公的自意識、形式主義が化粧規範意識を規定していた。

キーワード：化粧規範意識、他者意識、自意識、形式主義、独自性欲求

### 1. はじめに

ひとは生きていくなかで、その集団の成員としてふさわしい生活様式、価値を身につける。それは化粧も同様である。それゆえ、ひとは状況に応じて一定の方法で化粧を行なう。つまり、社会的な場面で化粧行動を規定する行動や判断の基準としての化粧規範意識が、人々のあいだで存在していると考えることができる。

こうした化粧規範意識に関連して、これまで平松がいくつかの研究を行なっている。

平松・牛田<sup>1)</sup>は、化粧を施す生活場面とそれを規定する化粧意識について検討した。それによると、対人接触や状況の公私の高さにより化粧を施す生活場面が構造化され、男性では必需品・身だしなみが、女性では魅力向上・気分高揚、必需品・身だしなみ、効果不安が化粧を施す生活場면을規定している。平松<sup>2)</sup>は、公衆場面での化粧行動への社会的是非について検討した。それによると、公衆場面での化粧行動や社会的是非は、特定・不特定の他者の存在や状況の公私によって構造化されていること、不特定他者がいる比較的公的な場面で社会的にも化粧をしてよいと考えている者は、特定・不特定の他者の存在に関係なく化粧行動を行なっている。さらに平松<sup>3)</sup>は、学生と彼らの親世代を対象に、化粧規範意識の構造について検討した。それによると化粧規範意識は、調和、個性、同調、近接、若さの 5 つの因子で構造化される。さらに、クラスター分析によって調査対象者の類型化を試みた結果、学生よりも親世代の方が化粧規範意識の高い。

これらの結果は、化粧についての社会的場面で共有されている暗黙のルールとしての規範意識の存在を示唆している。しかしながら人々は、そのルールを認識しながらも、自分なりの重み付けを行ない、化粧の程度や内容をかえている。つまり、

同じ社会的場面であったとしても、一般的に問題とされる共通の化粧基準のなかで、個人がどの基準をどの程度重視するかによって実際の行動は異なる。それには、個人差要因の影響が考えられる。

これまで、衣服に関する着装規範意識研究では、牛田ら<sup>4)</sup>によって、公的自意識や私的自意識、形式主義や社会的スキルとの関連があきらかとなっている。また、化粧に関する研究においても、個人差要因との関連は検討されてきた。

平松・牛田<sup>5)</sup>によれば、化粧関心・化粧行動・異性への化粧期待は公的自意識と男性性や女性性と関連し、平松・牛田<sup>6)</sup>によれば、化粧意識は公的自意識や外的他者意識と関連し、平松<sup>2)</sup>によれば、公衆場面における化粧行動や社会的是非は公的自意識や外的他者意識と関連する。

以上をふまえるならば、化粧規範意識に関しても、個人差要因との関連が仮説できる。そこで本研究では、先行研究の結果および平松<sup>3)</sup>であきらかにされた化粧規範意識の構造をふまえて、化粧規範意識に関連すると考えられる他者意識、自意識、形式主義、独自性欲求を取り上げ、それら個人差要因が化粧規範意識とどのように関連するかについて検討を行なった。

### 2. 調査の概要

#### 2-1 調査方法、調査時期、調査対象者

調査は、平松<sup>3)</sup>と同時に、関西にいる大学生およびその両親を中心とする社会人を対象に質問紙調査で行なった。倫理的配慮として調査票に研究の目的、回答は任意であり、無記名で個人が特定されないことを明記した。

調査対象者は、学生男子 190 人（平均年齢=20.08 歳, SD=1.69）、学生女子 342 人（平均年齢=19.33 歳, SD=1.27）、親世代男子 47 人（平均年齢=49.30 歳, SD=4.99）、親世代女子 158 人（平均年齢=47.44

歳, SD=4.33)であった。

## 2-2 調査内容

### 1) 社会的場面の重要度

平松<sup>3)</sup>で世代や性別を通じて経験度が高く、また一般的と考えられる10項目の社会的場面を選定した。10項目の社会的場面とは「同窓会に出席する」「学校で授業を受ける」「友人(同性/異性)と外出する」「小さな子ども(幼稚園児)と接する」「結婚式に出席する」「近所のスーパー/コンビニで買い物をする」「病院へお見舞いに行く」「家族と外出する」「デパートで買い物をする」「仕事(アルバイト)に行く」である。

それぞれの場面をどの程度重視するかについて、「重要ではない(1)」から「重要である(5)」までの5件法で回答を求めた。平松<sup>3)</sup>で主成分分析(Varimax回転)を行なった結果、「家族と外出する」「学校で授業を受ける」などの項目が高く寄与する『私的場面』、「同窓会に出席する」「結婚式に出席する」などの項目が高く寄与する『公的場面』の2因子があきらかとなった。そのため、この2因子で簡便因子得点(各因子をより明確にするため、因子ごとに高く負荷する項目の得点を合計し、それをその項目数で除する方法)を算出し、以後の分析データとした。

### 2) 化粧規範意識

平松<sup>3)</sup>で12項目の化粧基準を選定し、10項目の社会的場面と組み合わせ、例えば『同窓会に出席する』ときには『自分を引き立てる化粧をする』というような120項目の化粧規範意識項目を設定した。12項目の化粧基準とは、「自分を引き立てる化粧をする」「周囲の人から信用を損なわない化粧をする」「伝統やしきたりにあっている化粧をする」「自分の好みにあっている化粧をする」「自分の社会的地位や立場にふさわしい化粧をする」「周囲の人と同じ化粧をする」「自分らしさが表現できる化粧をする」「周囲の人に失礼にならない化粧をする」「目新しく人目をひく化粧をする」「自分の魅力がアップできる化粧をする」「自分の性や年齢にあっている化粧をする」「若々しくみえる化粧をする」であり、10項目の社会的場面とは社会的場面の重要度と同一の項目である。

それぞれの項目について、その場面でどのように化粧をすることを心がけることが、どの程度必要と思うかを、「必要ではない(1)」から「必要である(5)」までの5件法で回答を求めた。平松<sup>3)</sup>で主成分分析(Varimax回転)を行なった結果、「結婚式に出席する×周囲の人から信用を損なわ

ない化粧をする」「結婚式に出席する×周囲の人に失礼にならない化粧をする」などの項目が高く寄与する『調和』、「結婚式に出席する×自分らしさが表現できる化粧をする」「仕事(アルバイト)に行く×自分の好みにあっている化粧をする」などの項目が高く寄与する『個性』、「デパートで買い物をする×周囲の人と同じ化粧をする」「友人と外出する×周囲の人と同じ化粧をする」などの項目が高く寄与する『同調』、「近所のスーパーやコンビニで買い物をする×自分の魅力がアップできる化粧をする」「近所のスーパーやコンビニで買い物をする×自分らしさが表現できる化粧をする」などの項目が高く寄与する『近接』、「家族と外出する×若々しくみえる化粧をする」「友人と外出する×若々しくみえる化粧をする」などの項目が高く寄与する『若さ』の5因子があきらかとなった。そのため、この5因子で、簡便因子得点(各因子をより明確にするため、因子ごとに高く負荷する項目の得点を合計し、それをその項目数で除する方法)を算出し、以後の分析データとした。

### 3) 他者意識

他者意識とは他者への注意、関心、意識が向けられた状態をいい、他者への注意の向けやすさに関する性格特性である。他者の気持ちや感情などの内面情報を敏感にキャッチし理解しようとする意識や関心の程度である内的他者意識、他者の化粧、服装、体形、スタイルなどの外面にあらわれた特徴への注意や関心の程度である外的他者意識、他者について考え、空想をめぐらせその空想的イメージに注意を焦点づけ、それを追いかける傾向の程度である空想的他者意識からなる。

本研究では、辻<sup>7)</sup>の他者意識尺度15項目を用いて「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」までの5件法で得点化を行なった。確認のため因子分析(主因子法・Varimax回転)を行ない、既存尺度と同じ3因子を得た。内的整合性の点から15項目全てで得点化した(内的他者意識: $\alpha=0.84$ , 外的他者意識: $\alpha=0.77$ , 空想的他者意識: $\alpha=0.81$ )。

### 4) 自意識

自意識とは、自分自身への注意の向けやすさに関する性格特性である。自分の外見や他者に対する行動など外から見える自己の側面に対する注意を向ける程度の公的自意識、自分の内面や気分など外からみえない自分の側面に注意を向ける程度の私的自意識からなる。

本研究では、菅原<sup>8)</sup>の自意識尺度21項目を用いて「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」

Table 1 個人差要因の平均値と標準偏差 (ANOVA・Scheffe)

	学生男子		学生女子		親世代男子		親世代女子		F値	有意水準
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
内的他者意識	3.58	0.74	3.69	0.77	3.43	0.79	3.43	0.73	3.97	**
外的他者意識	3.36	0.81	3.82	0.83	2.67	0.98	3.09	0.84	35.50	***
空想的他者意識	3.03	0.93	3.27	0.90	2.49	1.03	2.76	0.91	14.64	***
公的自意識	3.52	0.67	3.85	0.67	3.12	0.79	3.35	0.71	26.41	***
私的自意識	3.30	0.63	3.61	0.73	3.34	0.76	3.36	0.71	9.11	***
形式主義	2.87	0.58	2.77	0.62	3.14	0.65	2.93	0.48	7.84	***
独自性欲求	3.00	0.34	3.02	0.36	3.02	0.39	2.88	0.29	4.79	**

\*\* $P < .01$  \*\*\* $P < .001$ 

Table 2 社会的場面の重要度と個人差要因との重回帰分析 (Stepwise)

	私的場面				公的場面					
	学生男子	学生女子	親世代男子	親世代女子	学生男子	学生女子	親世代男子	親世代女子		
	8	6	8	6	8	6	8	6		
内的他者意識	0.26	**								
外的他者意識		0.25	***		0.26	**				
空想的他者意識										
公的自意識				0.31	**	0.26	***			
私的自意識			0.56	***						
形式主義		0.19	**							
独自性欲求								0.20	*	
決定係数	0.07	**	0.10	***	0.31	***	0.09	**	0.07	**

\* $P < .05$  \*\* $P < .01$  \*\*\* $P < .001$ 

までの5件法で得点化を行なった。確認のため因子分析(主因子法・Varimax回転)を行ない、既存尺度と同じ2因子を得た。内的整合性および因子構造の点から不適切な「世間体など気にならない」「自分自身の内面のことには、あまり関心がない」をのぞく19項目で得点化した(公的自意識： $\alpha=0.85$ 、私的自意識： $\alpha=0.82$ )。

### 5) 形式主義

形式主義とは、社会的序列内での自分の位置を意識し、社会的行動における暗黙の規則を強調し、礼儀作法を特別に重視し、身だしなみや話し方が適切であることに価値を置き、体面を維持しようとする性格特性である。形式主義の強い者は自分が社会的ルールに強く固執するだけではなく、他人にもそれを重んじるように期待し、要求する。

本研究では、大淵<sup>9)</sup>の形式主義尺度10項目を用いて「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」までの5件法で得点化を行なった。確認のため因子分析(主因子法・Varimax回転)を行い、既存尺度と同じ1因子を得た。内的整合性の点から不適切な「行儀よく振る舞うことは、大切だと思う」「世のなかの礼儀作法やしきたりは、きゅうくつだ」をのぞく8項目で得点化した( $\alpha=0.64$ )。

### 6) 独自性欲求

人間には他人と異なるユニークな存在でありたいという欲求があり、それを独自性欲求とよぶ。人々の変身願望や自己顕示欲と密接に関連しながら、ときには反規範的意味を含む逸脱行動を引き

起こす重要な性格特性だとされる。そして、独自性欲求の強い者ほど、社会的規範からの逸脱程度が大きいこと、流行の採用が早いこと、個性的なよそおいをする傾向にあることが知られている。

本研究では、岡本<sup>10)</sup>の独自性欲求尺度32項目を用いて「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」までの5件法で得点化を行なった。確認のため因子分析(主因子法・Varimax回転)を行ない、既存尺度と同じ1因子を得た。内的整合性の点から32項目全てで得点化した( $\alpha=0.70$ )。

### 7) フェイス項目

年齢と性別を回答させた。

## 3. 結果

### 3-1 個人差要因の基礎統計量と世代差・男女差

他者意識、自意識、形式主義、独自性欲求の各個人差要因の世代と性別による差を検討するため、Scheffeによる多重比較を行なった(Table 1)。

その結果、内的他者意識(親世代女子<学生女子、 $F(3.607)=3.97$ ,  $p<0.01$ )、外的他者意識(学生男子・親世代男子・親世代女子<学生女子、親世代男子<学生男子、 $F(3.607)=35.50$ ,  $p<0.001$ )、空想的他者意識(親世代男子・親世代女子<学生男子・学生女子、 $F(3.607)=14.64$ ,  $p<0.001$ )、公的自意識(学生男子・親世代男子・親世代女子<学生女子、親世代男子<学生男子、 $F(3.607)=26.41$ ,  $p<0.001$ )、私的自意識(学生男子・親世代男子・親世代女子<学生女子、 $F$

Table 3 化粧規範意識と個人差要因との重回帰分析 (Stepwise)

	調和							
	学生男子		学生女子		親世代男子		親世代女子	
	B	有意水準	B	有意水準	B	有意水準	B	有意水準
内的他者意識							0.45	***
外的他者意識								
空想的他者意識							-0.27	*
公的自意識			0.29	***				
私的自意識					0.47	**		
形式主義								
独自性欲求	0.24	**						
決定係数	0.06	**	0.08	***	0.22	**	0.12	**

\*P<.05 \*\*P<.01 \*\*\*P<.001

	個性							
	学生男子		学生女子		親世代男子		親世代女子	
	B	有意水準	B	有意水準	B	有意水準	B	有意水準
内的他者意識								
外的他者意識			0.17	*				
空想的他者意識								
公的自意識			0.25	***			0.41	***
私的自意識					0.56	***		
形式主義	0.19	*	0.14	*				
独自性欲求	0.17	*	0.13	*				
決定係数	0.09	**	0.20	***	0.31	***	0.16	***

\*P<.05 \*\*P<.01 \*\*\*P<.001

	同調							
	学生男子		学生女子		親世代男子		親世代女子	
	B	有意水準	B	有意水準	B	有意水準	B	有意水準
内的他者意識								
外的他者意識								
空想的他者意識								
公的自意識			0.16	**			0.26	**
私的自意識					0.56	***		
形式主義	0.20	*	0.22	***			0.32	**
独自性欲求	0.23	**	0.27	***				
決定係数	0.12	***	0.22	***	0.32	***	0.17	***

\*P<.05 \*\*P<.01 \*\*\*P<.001

	近接							
	学生男子		学生女子		親世代男子		親世代女子	
	B	有意水準	B	有意水準	B	有意水準	B	有意水準
内的他者意識								
外的他者意識								
空想的他者意識								
公的自意識			0.24	***			0.33	***
私的自意識			-0.17	**	0.41	**		
形式主義	0.18	*	0.23	***				
独自性欲求	0.17	*						
決定係数	0.08	**	0.08	***	0.17	**	0.11	***

\*P<.05 \*\*P<.01 \*\*\*P<.001

	若さ							
	学生男子		学生女子		親世代男子		親世代女子	
	B	有意水準	B	有意水準	B	有意水準	B	有意水準
内的他者意識								
外的他者意識								
空想的他者意識								
公的自意識			0.16	**			0.31	***
私的自意識					0.52	**		
形式主義	0.21	*	0.20	**				
独自性欲求	0.19	*	0.15	*				
決定係数	0.10	***	0.11	***	0.27	**	0.11	***

\*P<.05 \*\*P<.01 \*\*\*P<.001

(3.607)=9.11, p<0.001), 形式主義 (学生男子・学生女子<親世代男子, : F (3.607) =7.84, p<0.001), 独自性欲求 (親世代女子<学生女子 : F (3.607) =4.79, p<0.01) で有意な主効果が認められた。

### 3-2 社会的場面の重要度と個人差要因との関連性

社会的場面の重要度と個人差要因との関連性を検討するため, 社会的場面の各因子を目的変数とし, 各個人差要因を説明変数とする重回帰分析を Stepwise による変数選択法で行なった (Table 2)。

その結果, 学生男子では『私的場面』で内的他者意識が正に, 『公的場面』で外的他者意識が正に有意に選択された。学生女子では『私的場面』で外的他者意識と形式主義が正に, 『公的場面』で公的自意識が正に有意に選択された。親世代男子では『私的場面』で私的自意識が正に有意に選択され, 『公的場面』で有意に選択された個人差要因はなかった。親世代女子では『私的場面』で公的自意識が正に, 『公的場面』で独自性欲求が正に, 有意に選択された。

### 3-3 化粧規範意識と個人差要因との関連性

化粧規範意識と個人差要因との関連性を検討するため, 化粧規範意識の各因子を目的変数とし, 各個人差要因を説明変数とする重回帰分析を Stepwise による変数選択法で行なった (Table 3)。

その結果, 学生男子では『調和』で独自性欲求が正に, 『個性』で形式主義と独自性欲求が正に, 『同調』で形式主義と独自性欲求が正に, 『近接』で形式主義と独自性欲求が正に, 『若さ』で形式主義と独自性欲求が正に有意に選択された。学生女子では『調和』で公的自意識が正に, 『個性』で外的他者意識と公的自意識と形式主義と独自性欲求が正に, 『同調』で公的自意識と形式主義と独自性欲求が正に, 『近接』で公的自意識と形式主義が正に, 私的自意識が負に, 『若さ』で公的自意識と形式主義と独自性欲求が正に有意に選択された。親世代男子では『調和』で私的自意識が正に, 『個性』で私的自意識が正に, 『同調』で私的自意識が正に, 『近接』で私的自意識が正に, 『若さ』で私的自意識が正に有意に選択された。親世代女子では『調和』で内的他者意識が正に, 空想的他者意識が負に, 『個性』で公的自意識が正に, 『同調』で公的自意識と形式主義が正に, 『近接』で公的自意識が正に, 『若さ』で公的自意識が正に有意に選択された。

### 3-4 クラスターと個人差要因

構造化された化粧規範意識について, 平松<sup>3)</sup>で

Table 4 クラスター別における個人差要因の平均値と標準偏差 (ANOVA・Scheffe)

	クラスター1		クラスター2		クラスター3		F値	有意水準
	M	SD	M	SD	M	SD		
内的他者意識	3.38	0.89	3.56	0.72	3.91	0.71	10.58	***
外的他者意識	3.03	1.07	3.52	0.86	3.69	0.83	10.21	***
空想的他者意識	2.81	0.96	3.04	0.94	3.29	0.92	4.06	*
公的自意識	3.18	0.77	3.66	0.66	3.85	0.70	20.37	***
私的自意識	3.17	0.83	3.46	0.67	3.63	0.69	9.51	***
形式主義	2.74	0.67	2.82	0.52	3.05	0.62	7.79	***
独自性欲求	2.86	0.40	2.99	0.32	3.08	0.33	11.43	***

\* $P < .05$  \*\*\* $P < .001$ 

各因子における簡便因子得点を用いて Ward 法によるクラスター分析を行なった結果、樹形図から3クラスター構成がきらかとなっている。その結果をもとに、他者意識、自意識、形式主義、独自性欲求の各個人差要因の差を3クラスター間で検討するため、Scheffeによる多重比較を行なった (Table 4)。

その結果、内的他者意識 (クラスター1・クラスター2<クラスター3:  $F(2.528) = 10.58, p < 0.001$ )、外的他者意識 (クラスター1<クラスター2・クラスター3:  $F(2.528) = 10.21, p < 0.001$ )、空想的他者意識 (クラスター1<クラスター3:  $F(2.528) = 4.06, p < 0.05$ )、公的自意識 (クラスター1<クラスター2・クラスター3:  $F(2.528) = 20.37, p < 0.001$ )、私的自意識 (クラスター1<クラスター2・クラスター3:  $F(2.528) = 9.51, p < 0.001$ )、形式主義 (クラスター1・クラスター2<クラスター3:  $F(2.528) = 7.79, p < 0.001$ )、独自性欲求 (クラスター1<クラスター2, クラスター1・クラスター2<クラスター3:  $F(2.528) = 11.43, p < 0.001$ ) で有意な主効果が認められた。

#### 4. 考察

##### 4-1 個人差要因の世代差および男女差

個人差要因の世代と性別による差を検討したところ、おおむね親世代に比べ学生の方が、男性に比べ女性の方が、他者意識、自意識、形式主義、独自性欲求が高いことがわかった。

##### 4-2 社会的場面の重要度と個人差要因

学生男子では、他者の気持ちや感情などを意識しやすい者ほど『私的場面』を重視していることがわかった。また、他者の外面を意識しやすい者ほど『公的場面』を重視していた。学生女子では、他者の外面を意識しやすい者や社会の暗黙のルールや礼儀作法を重視する者ほど『私的場面』を重視していることがわかった。また、他者からみられる自己を意識しやすい者ほど『公的場面』を重

視していることがわかった。親世代男子では、自己の気分や感情を意識しやすい者ほど『私的場面』を重視していることがわかった。親世代女子では、他者からみられる自己を意識しやすい者ほど『私的場面』を重視していることがわかった。また、他人と異なるユニークな存在でありたいという欲求が強い者ほど『公的場面』を重視していることがわかった。

おおむね、世代に関係なく男性は自己や他者への内面への意識の向けやすさが『私的場面』と関連し、女性は自己や他者の外面への注意の向けやすさが『私的場面』と関連していることがわかった。学生では自己や他者の外面への注意の向けやすさが『公的場面』と関連していた。親世代では女性だけにはあるが、他人と異なるユニークな存在でありたいという欲求が『公的場面』と関連していた。『私的場面』は「家族と外出する」などが高く負荷する因子であり、比較的私的な社会的場面である。そのため男性では、気分や感情への意識と関連していたと推測される。しかしながら女性の場合、「同窓会に出席する」という比較的公的な社会的場面はもちろんのこと、私的な社会的場面である『私的場面』でも外面への意識の高さが関連していた。これは、化粧や衣服などへの関心と関連しているのではないかと推測される。

##### 4-3 化粧規範意識と個人差要因

学生男子では、他人と異なるユニークな存在でありたいという欲求が強い者ほど『調和』の意識が高いこと、他人と異なるユニークな存在でありたいという欲求が強く、社会の暗黙のルールや礼儀作法を重視する者ほど『個性』『同調』『近接』『若さ』の意識が高いことがわかった。学生女子では、他者からみられる自己を意識しやすい者ほど『調和』の意識が高いこと、他者の外面や他者からみられる自己を意識しやすく、社会の暗黙のルールや礼儀作法を重視し、他人と異なるユニークな存在でありたいという欲求が強い者ほど『個

性』の意識が高いこと、他者からみられる自己を意識しやすく、社会の暗黙のルールや礼儀作法を重視し、他人と異なるユニークな存在でありたいという欲求が強い者ほど『同調』の意識が高いこと、他者からみられる自己を意識しやすく、社会の暗黙のルールや礼儀作法を重視し、自己の気分や感情をあまり意識しない者ほど『近接』の意識が高いこと、他者からみられる自己を意識しやすく、社会の暗黙のルールや礼儀作法を重視し、他人と異なるユニークな存在でありたいという欲求が強い者ほど『若さ』の意識が高いことがわかった。親世代男子では、自己の気分や感情を意識しやすい者ほど『調和』『個性』『同調』『近接』『若さ』の意識が高いことがわかった。親世代女子では、他者の内面を意識しやすく現前しない他者をあまり意識しない者ほど『調和』の意識が高いこと、他者からみられる自己を意識しやすい者ほど『個性』『近接』『若さ』の意識が高いこと、他者からみられる自己を意識しやすく社会の暗黙のルールや礼儀作法を重視する者ほど『同調』の意識が高いことがわかった。

おおむね男女を問わず学生では、他人と異なるユニークな存在でありたいという欲求や、社会の暗黙のルールや礼儀作法の重視と化粧規範意識が関連している。笹山・永松<sup>11)</sup>は、年齢が若い女性ほど化粧をアクセサリのようなものととらえ、美しく見せたい、創作するのが楽しいという意識を持っていることをあきらかにしているが、この若年齢層の化粧をおしゃれの一部としてとらえている意識が、他人と異なるユニークな存在でありたいという欲求と関連していると推測される。しかしながら化粧規範意識は、社会的場面でどのような化粧を行なうかというルールである以上、社会の暗黙のルールや礼儀作法の重視も関連しており、今回の調査対象者である若年齢層では、化粧規範意識は社会化の途中にあるのではないかと推測される。親世代男子では、自己の内面への注意の向けやすさが化粧規範意識と関連していた。

着装規範意識と個人差要因との関連性を検討した牛田ら<sup>4)</sup>の研究でも、社会人男性では私的自意識と着装規範意識の関連性があきらかとなっている。そのため本研究結果は、衣服や化粧に関する規範意識に共通して、親世代や社会人男性では私的自意識が関連することをあきらかにした。しかしながら、学生女子や親世代女子では公的自意識との関連があきらかとなっている。Fenigsteinら<sup>12)</sup>などの研究から、私的自意識の高さは一般的

に自己概念や自らの意志決定に基づく判断と関連するとされている。そのため周囲の状況に合わせることを必要とする規範意識とは本来、無関係であると推測されるため、今後詳細な検討が必要である。

#### 4-4 クラスタと個人差要因

すべての個人差要因で、他のクラスタよりもクラスタ1は低く、クラスタ3は高いことがわかった。おおむね、個人差要因の高さが化粧規範意識の高さと関連するという特徴が示唆された。

平松<sup>3)</sup>で、クラスタ1では学生男子や親世代男子が多く、反対にクラスタ2やクラスタ3では学生女子や親世代女子が多いことがあきらかとなっている。この結果は、個人差要因の世代と性別による差において、おおむね親世代に比べ学生の方が、男性に比べ女性の方が、他者意識、自意識、形式主義、独自性欲求が高いことと一致する結果である。

#### 5. まとめと今後の課題

これまでの化粧に関する研究や関連する着装規範に関する研究においても、個人差要因との関連性はあきらかにされてきたが、本研究から化粧規範意識についても他者意識、自意識、形式主義、独自性欲求との関連性があきらかとなった。とくに、他者からみられる自己の意識のしやすさ、社会の暗黙のルールや礼儀作法の重視し、他人と異なるユニークな存在でありたいという欲求が関連していた。

世代や性別で異なる個人差要因が化粧規範意識と関連していたことから、今後はその他の個人差要因との関連性の検討を含めた知見の吟味が必要であると考えられる。

#### 参考文献

- 1) 平松隆円・牛田聡子：化粧規範に関する研究—化粧を施す生活場面とそれを規定する化粧意識と個人差要因—, 織消誌, 48(12): 59-68 (2008)
- 2) 平松隆円；公衆場面での化粧行動への社会的是非と個人差要因の関連性, ファッションビジネス学会誌, 15: 33-42 (2010)
- 3) 平松隆円；化粧規範に関する研究—社会的場面と化粧基準の評定に基づく化粧規範意識の構造化—, 織消誌, 55(2): 44-51 (2014)
- 4) 牛田聡子・高木修・神山進・阿部久美子・辻幸恵；着装規範に関する研究(第4報)—着

- 装規範意識を規定する個人差要因（自意識・形式主義・社会的スキル）一，織消誌，41(11): 17-24 (2000)
- 5) 平松隆円・牛田聡子：化粧に関する研究（第2報）—大学生の化粧関心・化粧行動・異性への化粧期待と個人差要因—，織消誌，44(11): 69-75 (2003)
- 6) 平松隆円・牛田聡子：化粧に関する研究（第4報）—大学生の化粧意識とそれを規定する個人差要因—，織消誌，45(11): 63-70 (2004)
- 7) 辻平治郎：自己意識と他者意識，北大路書房 (1993)，京都
- 8) 菅原健介：自意識尺度日本語版作成の試み，心理学研究，55：184-188 (1984)
- 9) 大淵憲一：対人行動とパーソナリティ，北大路書房 (1991)，京都
- 10) 岡本浩一：独自性欲求の個人差測定に関する基礎的研究，心理学研究，56(3)：160-166 (1985)
- 11) 笹山郁生・永松亜矢：化粧行動を規定する諸要因の関連性の検討，福岡教育大学紀要（第4分冊・教職科編），48：241-251 (1999)
- 12) Allan Fenigstein, Michael Scheier, Arnold Buss: Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43(4): 522-527 (1998)